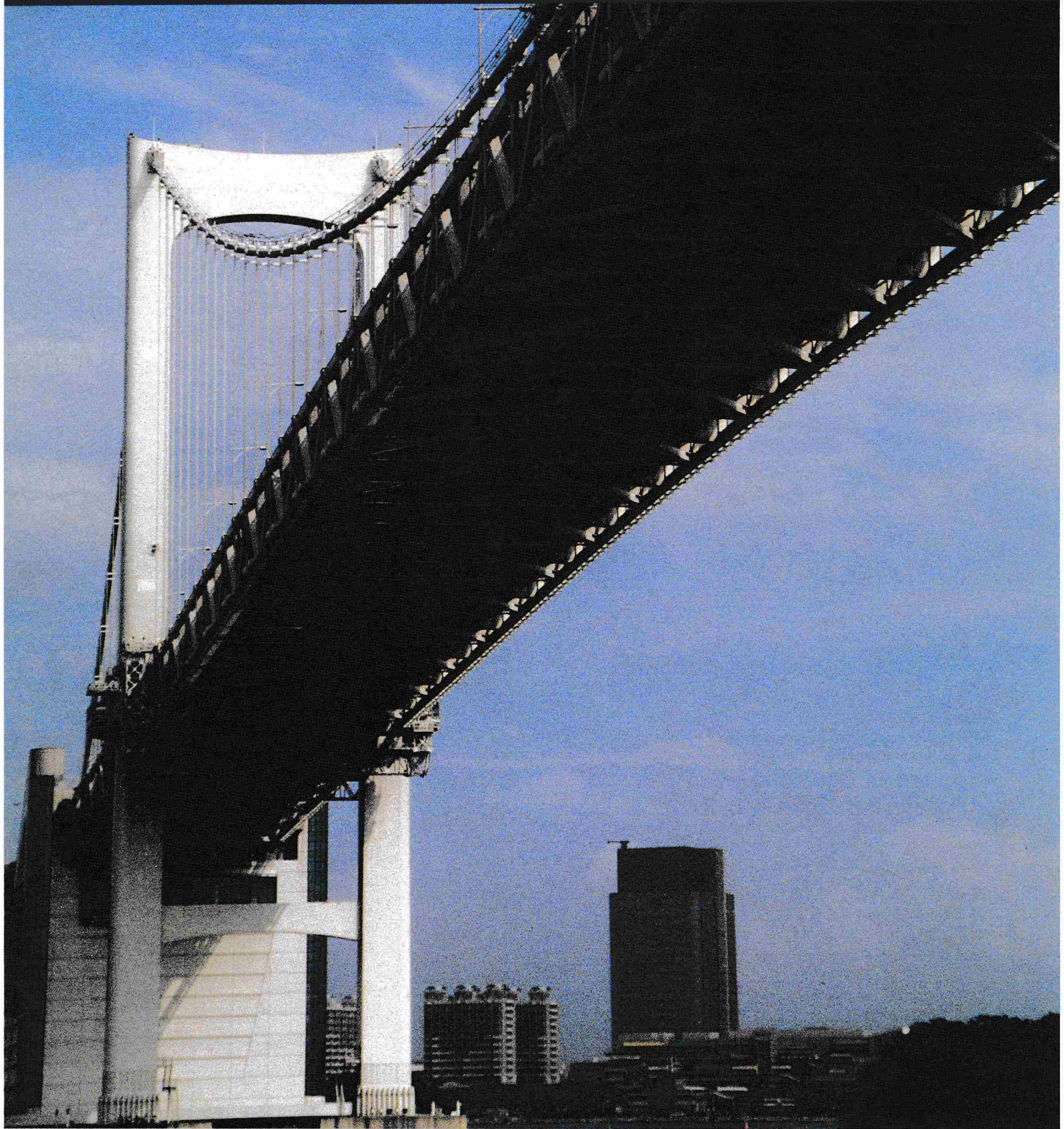


1997/1 NO.22

aaca

社団法人 日本建築美術工芸協会



CONTENTS

水上から見た東京の景観……………	1
世界と日本のウォーターフロント……………	6
文化庁特別派遣芸術家在外研修員報告 ……	8
時代の華一輪	
伊東 寿太郎……………	10
近田 玲子……………	11
aacaトーク	
五十嵐 芳増……………	12
永原 浄……………	13
アピアランス(会員作品紹介)……………	14

■表紙写真

「レインボーブリッジ」

発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事、柳澤孝彦

玉見 満(委員長)、高部多恵子、坂上みつ子

富田俊男、北村孝昭、石田真人、

渡部毅志

制作協力：(株)SP建材エージェンシー

調査研究委員会では、8月の暑い一日、水上から東京の景観を観察するクルーズを行った。これまでも、ファール立川の見学会をしたり、神戸地震の被害調査に出かけたりしたが、今回はふだん見慣れている東京の町を少し視点を変えて観察してみようという企画である。

まず、東京港めぐりの船に乗った。午後3時に日の出棧橋を出航して、レインボーブリッジをくぐり、片側には品川埠頭などの貨物埠頭を眺め、反対側にはお台場海浜公園から湾岸副都心を遠望し、いったん戻って豊洲埠頭、晴海埠頭などを巡る50分の旅であった。この辺りは、大きな東京港を構成するいくつかの埠頭が並ぶ地域であり、いっぽう、芝浦とお台場・有明を結ぶ全長798mの海上橋が高速道路と新交通システム「ゆりかもめ」を走らせ、都市博の中止で開発の氣勢が多少そがれはしたが、若者の間で人気を得つつある地域である。

続いて、同じ日の出棧橋から浅草に至る水上バスに乗った。勝鬨橋から隅田川を遡り、佃大橋から吾妻橋にいたる13の橋の下をくぐるコースである。これは、戦前、隅田川の渡しとして親しまれていたポンポン蒸気の名残りをとどめる名物コースである。永代橋、清洲橋などのかつての名橋に佃大橋、中央大橋などの新しい2橋が加わり、両岸の防潮護岸整備はほぼ終盤に近づいている。

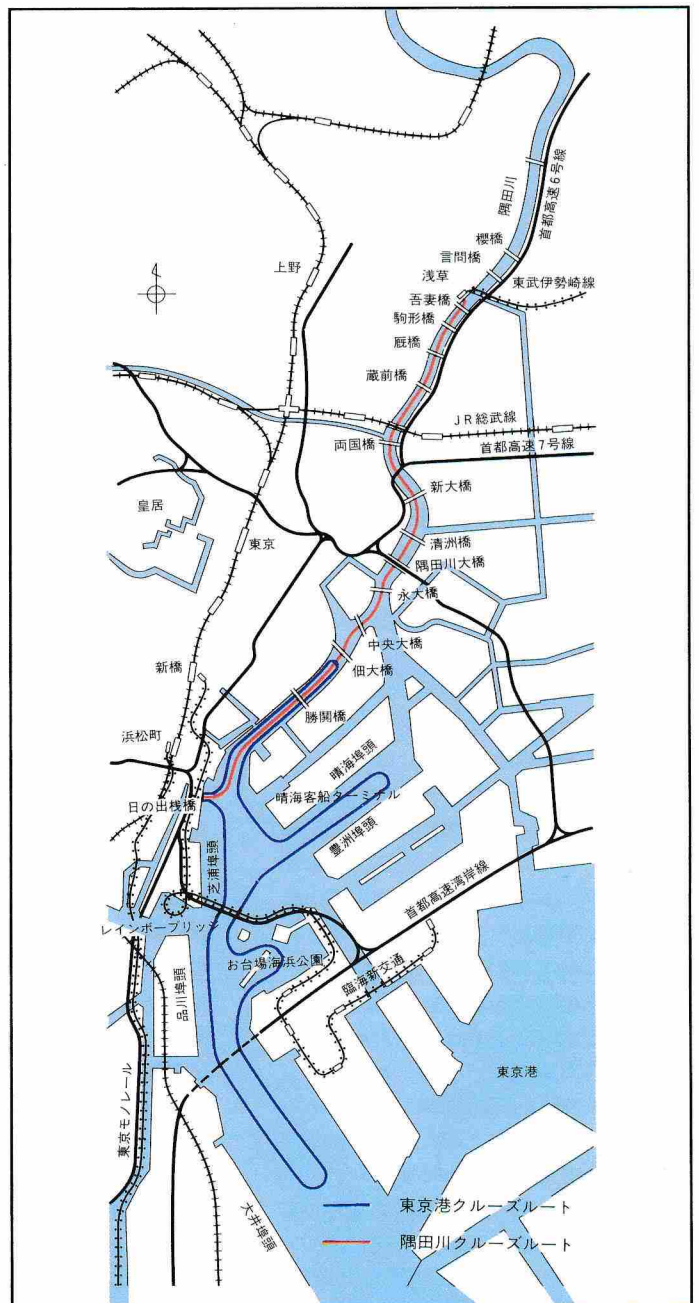
東京湾花火の前日で、乗船した頃はまだ日差しが強かったが、下船して浅草観音に詣でた頃には吹く風も幾分なごんでいた。

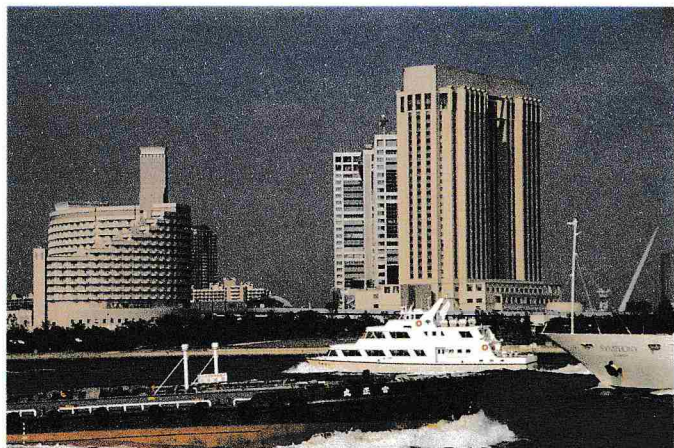
クルーズの間は参加した9名がそれぞれ勝手に観察し、写真を撮るなどしたので、水上から何を見、何を感じたかは人によりさまざまである。以下には、このクルーズから得たものを自由に語ってもらって、都市景観を考えるヒントのようなものを読みとっていただければと考える。



なお、本誌次号からは、調査委員会が編集を担当するページを新たにつくってもらう予定である。「都市空間と芸術文化」と題するシリーズで続けたいと考えている。

建築・美術・工芸にかかわる問題を、都市景観やパブリックアートといったハードに直接着目して論ずるのではなく、生活や自然などソフトの面から多角的に論じたいと思っている。(調査研究委員会委員長 守屋秀夫)





水辺の景観

守屋 秀夫

建築や敷地には表と裏がある。表通りに面した側が表であり、建物のファサードには格式の表現と顔としての造りがあるが、裏通り側や建物の背中どうしが見合う側は裏で、サービスヤードなどのあまり人に見られたくないものが位置する。通常都市景観とされているのは表側の景観のことであり、裏側は多少見苦しくても必要悪として見逃してもらっている。ただし、お互いに表の顔の並んだ側に裏を見せるのはもつてのほかで、これが都市づくりの暗黙のルールであった。

ここで気になるのが、鉄道線路に面した景観と、川や海に面した景観であるが、古くは水上の船が重要な交通・流通手段であったために、主要な海や川に面したところはすべて表として扱われていた。このことは、荷揚場をもつ河岸を描いた木版画やベニスの風景を思い浮かべれば明らかである。近代以降水運がすたれると、このことが無視されるようになった。

現代では、水運は外洋と行き来するものに限られるために、港では貨物船の埠頭ばかりが並ぶようになった。これはサービスヤードの様相をもち、味も素っ気もない裏の表情となるが、水上を行く人が少ないために、経済優先の原理が働き、景観としては誰からも顧みられなくなった。最近の埋立地は、土地と埠頭を得るための埋め立てであって、ウォーターフロントなどの美辞麗句も宣伝の手段にすぎず、依然として海側を表と考える発想はまったくなかったと見受けられる。

川に面しては、東京の少し昔の堀割りに面した多くの建物群を見ればわかるとおり、現代ではすべて川は裏側と割り切られて

いた。わずかに中洲や柳橋の料亭群だけが隅田川の景色を取り入れていたが、それも近年の築造堤防に遮られて、しだいに川と縁を切っていった。

今回のクルーズで見つけたのは、墨田川下流部のスーパー堤防と河岸遊歩道である。スーパー堤防は堤防の斜面を緑の法面で構成するもので、勾配が急すぎる感はあるものの、川を表と意識させた効果は認められる。河岸遊歩道は隅田川の兩岸何キロかにわたって設けられているが、背面となる堤防の擁壁に絵画や彫刻を施したものである。デザイン的には稚拙かもしれないが、以前に同じ水上バスで通ったときと比べれば、はるかに気持ちよい船路に感じさせてくれた。水上からの景観は、個々の建物で考えたのではだめで、都市的スケールの連続で考慮する必要があることも教えてくれた。

東京臨海部景観考

小林 治人

東京臨海部を水上から見ると、幾何学的なビル群、巨大なクレーンが林立して臨海部固有のスカイラインを不連続的に構成している。そこに表現される風景には、世界の諸都市の港湾風景と基本的に類似性を持ちながら一味違う身近な印象がある。自分が生活する国の風景からは、風景に表現された暮らしの物語の意味が直接的に読み取れるからだろう。その反面、この風景を外国人が初めて見たらどの様に評価するのだろうかと考えた。

かつて、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカなどそれぞれ異なる風土・地域ごとに、風景を構成している建物の形や色が異なって、際立った対比性を見せて

いたのに、近代化された臨海部がもつ世界共通の機能性が、地域の固有性を弱めているように見える世界的傾向の中で、シドニーのオペラハウス、ニューヨークの世界貿易センター、バンコクのパゴダ、イスタンブールのモスクなどそれぞれがピュラーな意味をもった形は、地域ごとのシンボル性を高めながら、人の目に美しい印象を与えてくれる。東京臨海部の場合、何が印象的な、シーンとなるのだろうか。

ベイブリッジの先端的土木技術の成果や、臨海副都心予定地の20世紀末建築デザインによるビル群が、経済大国になった日本の姿を象徴的に表現し、新しい日本の姿を印象づけることになるのだろうか？クルーズを行った日は、それらは真夏の太陽にさん然と輝いて頼もしく見えたが、反面これらの巨大な文明構築の営為が、どのような方向で将来の臨海地域環境の在り方を決定付けていくのかと気になった。

そんな中で、水際線が景観全体の連続性を保つ上で非常に重要であることを再認識した。大部分の水際線は、コンクリートの直立岸壁であるが、お台場の石積みは歴史性を、岸辺に残された残杭とそこに翼を休めるウミウは生き物空間としての海を、浜離宮庭園、お台場公園、辰巳公園、緑道などの緑は、空間全体の連続性と、人工的構築物の前景として水面との関係を安定的に見せるのに役だっているように思う。隅田川の堤防は、水面から見ると奇異に感じるほど多様なデザインが施されているが、率直なところ疑問をもった。

これらのデザインは橋の上あるいは堤防からの視点を意識した結果ではないかと大相撲秋場所を見にいったとき感じた。いずれにせよ風景造りが意識される時代であることを感じた。



「水の都」江戸はどこへ行った？ 日高 單也

東京港 共同体としての、景観づくりを！

海と空に挟まれ、もやった空気に包まれた建築群、海からの風景を切り取ってみる。海からはえた建物たちが、それぞれに自己主張して、天に突き刺さる。そこには無機質な現代文明の力を感じるものの、江戸・東京の風土や歴史に裏打ちされた文化は感じられない。模型の世界をそのまま現実の世界に移行した、この異空間には驚異を覚える。だが、切り取った風景に空間的な奥行きを感じない。なぜだろう？……。江戸に築かれた台場に豊かな緑を目にしてホッとする。緑は風景に奥行きを感じさせ、無機質な空間に救いを与えている。勝手気ままに自己主張して林立する建物群の中にもっと縁があれば、水際にもっと木立があれば、幾何学的パターンが織りなすトゲトゲしさに和らぎと馴染みを与えることだろう。

何でもOKの勝手な空間からは質の高い共同体は生まれえない。多少の規制があればこそ、他者と協調する全体感も生まれる。素材、構法、形体、色調などの共通性は、都市共同体に、地域特性として魅力ある景観をかたち作った事実を見逃せない。

東京湾ウォーターフロントの景観づくりに向け、一体どんな青写真が用意され、どんな約束ごとを設けているのだろうか。墨田川 水辺へ挨拶する作法の復活を！

東京が江戸と呼ばれていた時代には名実ともに水の都江戸であったと言う。

昔から日本には門前の路地を掃き清めたり、水を打ったりする風習がある。これは公の空間（公道）に対する挨拶の顔の一つであり作法のこころえである。江戸では日常的に利用した水路に対して、さぞかしこの作法も生きていたことだろう。

水辺に建ち並ぶ家屋もファサードを整え挨拶の顔を忘れず、護岸もそれなりのものであったに違いない。私的空間の裏側や日常生活の排出物を水辺に向けて露出するような無作法は許されなかったことと想像する。

鉛直に築かれたコンクリートの護岸は、水を拒否するかたちではあっても水と親しむかたちではない。それは水辺へのファサード意識を簿れさせ、タレ流しを助長させ、あげくに「臭いものには蓋」の感を植えつけた元凶とも思える。ここ数年のことだろう、これはいかんと「水辺へ挨拶する顔」に化粧をただす姿が見え始めた。稚拙ではあるが無作法を正そうとする意識には拍手を送りたい。

墨田川の情景をうたった「花」の平成版が新たにうたわれることを期待する。

未来都市空間と裏側都市空間

中島 三枝子

今まで話題性のある都市空間のスポットが数多く紹介され、その都度、足を運びアートワークを中心に見学してきた。そこには人々が行き交い、人々のざわめきと息使いが都市空間を形成している。しかしこれはあくまでも陸の視界から眺めている光景にすぎない。

全く視点を変え、今回、川、海といった水上から都市空間を眺めてみることとなった。

ウォーターフロントと呼ばれる臨海副都心。東京湾は、以前訪れたエーゲ海の海の景色というわけにはいかないが、潮風の香り濃い日の出桟橋から出航した。間もなく総ガラス張りの建物、晴海客船ターミナルが視界に現われ、ウォーター

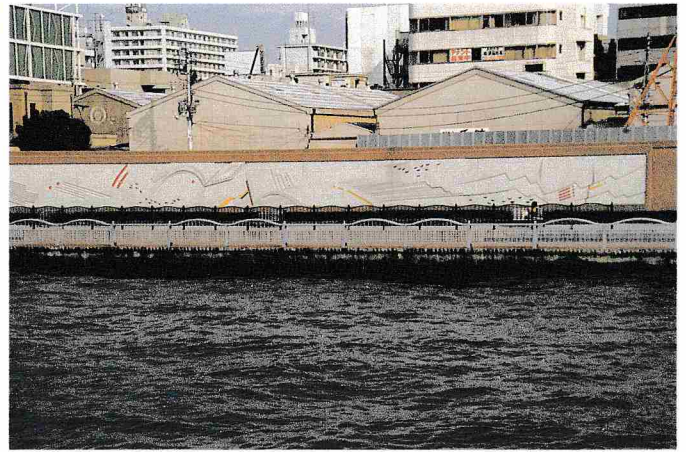
フロントと呼ばれる陸の孤島はすでに未来都市空間を予感させる。さらに、お台場海浜公園のゾーンにはオフィスビル、ホテル、住宅棟、商業施設、その上、人工に造成された砂浜までが用意されている。その沖いでマリンスポーツに興じる光景はまさに都市空間に必要な施設をツールに自由にコーディネートした未来都市空間だと納得させられる。

眼前には、空を背景にレインボーブリッジが「ゆりかもめ」と「舗道一人」、「高速道路一車」の機能をたずさえ宙に雄大に横たわる。

再び日の出桟橋に戻り隅田川を浅草に船はさか上る。そこには今まで見慣れた都市空間の勝手口といえる光景を目のあたりにする。かつては水路として多くの船が行き交い川に沿ったメインストリートであったに違いない。隅田川にかかる勝どき橋から吾妻橋迄の12基の橋は、藤沢周平の「橋ものがたり」に描かれている様に、人々が行き交い、様々な物語を生み出し江戸の都市空間の一端を担ったにちがいない。

その途中にもビルの間隙からときおり顔を見せるリバーピアのモニュメントが現代の都市空間の息使いを感じさせる。

多機能な施設、設備を備え、ウォーターフロントに無限に広がる未来都市空間、川から臨んだ都市空間の裏側、対象的な都市空間の有り様を見ることが出来た。



お台場臨海副都心

—この街はおもしろいかもしれない—

坂上 直哉

先日、水上バスで台場沖を通過した折、江戸の薫りを感じる史跡、お台場と、新都心との風景の重なりに惹かれ、今日再びここを訪れた。台場駅周辺の相変わらず根拠の見えない風景に多少苛立ちを覚えたが、磯に出ると思いの外、良い風景に出会った。恐らく全て意図され、人工的に計画されたのだろう。しかし、自然に対する力の行使を少し控えようとしているかのようにみえる。何処からか自然にまかせよう、時の経過を取込み、風景の制作を自然に帰そうとしているようだ。

磯にへばりつく牡蠣、鳥貝、漂う水クラゲ、渚は波に洗われ、小さな砂孔から蟹が這い出す。群れを成す水鳥、ウインドサーフィンの水切る赤い帆と杭に止まる海鷗の立姿との取合わせが美しい。浜には放置したかのように置かれた錨達。何の説明もないだけに、この場の歴史に思いを馳せる。背景に在るフジTVの宇宙的な建物も何故か映える。砂浜を抜けて林に入る。鉄砲ドングリを蹴りながら踏み入った野地での薄水色の糸蜻蛉との出会いが嬉しい。

私たちの祖先は、いつも森をそばにおいてきた。それが叶わぬ時には「市中の山居」、作法の森と暮らしてきた珍しき人種だ。鎮守の森は今日でも残され、そこは共同体の心の依り処でもあり、また、地域の原風景と自然をこの小宇宙に保存してきた。このお台場は新都心より約10分と、村外れに位置する鎮守の森と同じ構造の中にあり、あまり手を加えなければ台場の地形に助けられ、この小宇宙は循環し続けるだろう。

この風景は街の人々にとって里山的自

然、国木田独歩が散策したり、唱歌に歌われた、少し前にはありふれていた風景に近いかもしれない。既にここには、街一砂州一森という構造は種として蒔かれている。幸いにも残されたこの歴史と、自然との新しい関係をどの様に育てるかには住民が決めることだろう。

私は人を含めた様々な生き物の死を迎え、呑み込み、そして送り出せる、そういった趣の街が好きだ。レインボーブリッジからの眺めの畏しさ、凄まじさ、全て過剰な過剰さが汪溢する中、アーティストは何を調停すれば良いのだろうか。調停が哲学や歌だとしたら、どのような枕詞で歌詠みを始めるのだろうか。時の螺旋は静かに回転を止め、各々の螺旋が生まれるのだろうか。

今後の企画から風景の構造が少しでも明らかに、良い指針となればと考えている。



河口からみる東京の水辺

石井 博美

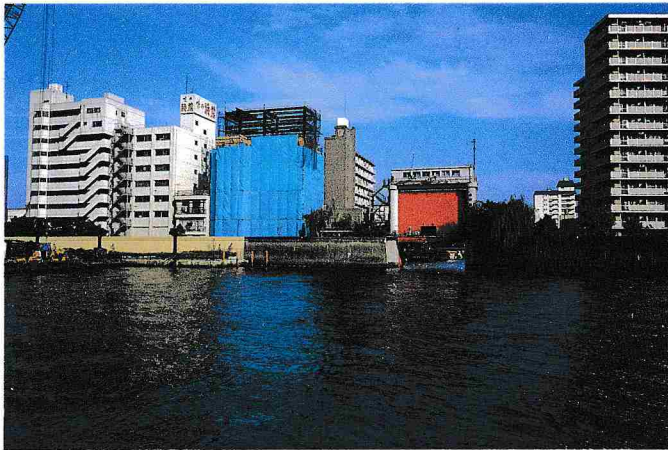
夏の終わりのこの季節にはゼロメートル地帯の水害のニュースが必ず新聞を賑わしていた記憶があるが、現在はそんな記事も目にしない。直立した堤防と水門が明確に陸と海を隔てて人々を水から守っているといった風景が続く。所々にある最近の工事と思われる堤防は、スーパー堤防と呼ばれる親水デッキと植栽の斜面を持つものになってきている。四六時

中海に対して身構えている必要も無いわけだから、水害の危険のある時間とそうでない時間の比率を考えれば当然の工夫かもしれない。水防の為の堤防から生活の一場面を提供する空間としての堤防に変化しつつあるということだろうか。浅草の辺りの両岸では親水デッキの壁際に、この空間をねぐらにしている人々のダンボールやビニールシートが続く。

湾の汚濁で衰退した沿岸漁業と陸上交通の発達によって過去のものになってしまった水上交通の施設。荒廃した首都の水辺の街は次々と整備されつつあり、整った建物や公園が水辺に押し寄せている。新しく水辺にある街は、建物や施設が水辺にあることの必然性が薄くなっているように思える。本来はその他の自然や文化、経済活動と密接に結び付いていたはずの「地の利」は東京の人間にとって違う意味の言葉になりつつあるのだろう。何処であろうとどんな施設でも経済的な効率さえ充たされれば建設が進行する。新しい施設が出来ることによる経済効果は詳細に互る数字の魔術によって喧伝されるが、文化、環境といった要素は置き去りにされるか付け足しの域を出ない。湾と河口の風景を見ながら都市は貧しいのだと思った。

城壁のように続く堤防の所々に水門がある。この水門の向こうに、水上交通が主要な交通だった頃からの水路が続いているのがみえる。東京都のマークが白く描かれた赤い水門は青い空と水に際立って美しかった。

舟が遡上している時は気がつかなかったが、浅草に着いて上陸する時にふと足元の水面を見ると確かに隅田川は流れていた。水は豊かに上流から流れてくる。もっと上流に行ってみなければという気持ちに駆られた。



チグハグ、墨田川の流れ

露口 典子

隅田川は江戸から近代へと、否応なしにその姿を変えてきた。一時は殺伐としていた川べりにも遊歩道や親水公園を設け、何とか少しでも人と川の間を取り戻そうという努力がなされている様子がよく解った。ところが、どうも釈然としない思いが残ってしまった。

再び日を改めて水上バスに乗ってみた。船の行く手に次々と現れる橋、超高層ビル群、マンション、町工場、卸問屋、国技館、常に視界に入ってくる高速道路。何もかも一緒に放り込んだような東京特有の風景の中で、堤防の壁とそれに伴う遊歩道がどうも気になった。

一番目立ったのが、両国橋から蔵前橋にかけてのなまこ壁。突然、江戸が出現する。そうかと思えば鮮やかな青で現代的にデザインされた波が現れる。他にも鱗文様、水紋、モザイク模様、壁画をはめ込む、レンガを積む、緑を植える等。日光江戸村や太秦映画村なら素直に面白がっていただけるが、現実の街だとそうはいかない。皆、それぞれの場所で、環境や景観を考えて一生懸命やっているのに、隅田川がひと筋の川として流れていないチグハグさを感じてしまう。隅田川は幾つかに分断され、それぞれの場所が自己主張の声をあげている。

地図では川の中央を区の境界線が走る。河口から浅草までを中央、台東、江東、墨田と4つの区が川を分けている。他にも隅田川のあちこちに境界線を引いてしまう社会システムが、收拾のつかない雑然さを作り出しているひとつの原因となっているのは周知の通りだ。

将来は、河口付近で見たスーパー堤防

なるものが上流まで作られると聞く。きっと小綺麗に整備されていくに違いない、と推測するものの、そこから以前のように、文学や歌や伝説などが生れ育っていくだろうか。

昔の人々にとって、川は多くの機能を持ち、それが豊かな情景を生み出していた。そのほとんどが失われた現代でも、水と生活を共にしてきた日本人は、川に本当の意味での多様性を求めているのではないだろうか。その心を見直す時間もなく、議論する時間もかけないで、隅田川がひと筋の川として流れることは最早有り得ないのではないだろうか。

アートプロデューサーとして、成すべきことの多さを教えてくれた墨田の流れだった。

墨田川の橋

山本 誠

一人娘のお久が自らの身を売って作ってくれた五十両を懐に、帰りを急ぐ左官屋の長兵衛が、身を投げようとしている雅弔問屋の文七に出会うのは橋の袂である。江戸っ子の心意気、その五十両をくれてやることから始まる有名な落語が文七元結で橋が重要な舞台となっている。

墨田川を船でのぼると震災復興による「橋の博覧会」と呼ばれた数々の橋を楽しむことが出来る。震災でそのほとんどが焼失したが、唯一残ったのがトラス橋の旧新大橋で、「お助け橋」と呼ばれた。現在はその一部が明治村に移設されている。墨田川に架かる橋で復興局が架設したものは言問橋、駒形橋、蔵前橋、清洲橋、永代橋で、吾妻橋、麩橋、両国橋の三橋

は東京市が架設した。復興局は被災時の安全を基本としながらも、帝都復興の都市造形を左右するものとし、橋の景観を都市美の重要な要素として位置づけ、有用には至らなかったが、詩人や画家などの文化人の意見も求めている。質実剛健、余分な装飾品を飾り過ぎず多弁を避け、構造は環境に順応し、その美しさは構造それ自身から生まれるとし、橋全体のシルエットを都市美としてとらえている。

それぞれの橋は個性を競うように、永代橋は「帝都の橋」として重量感溢れる男性的なアーチ橋であり、清洲橋は対照的に女性的で優美な隅田川随一の美しい橋といわれており、吊り橋を採用している。

私が改修デザインにかかわった両国橋は言問橋と同じ当時の技術水準の粋を集めた長大ゲルバー橋でシンプルなシルエットである。両国橋は復興最後（昭和7年竣工）の橋でコストが切り詰められ、言問橋の4割程度で741千円であった。改修デザインに当たってはゲルバー橋のシンプルなシルエットを壊さないこと。また当時の設計者の意図と歴史性を大切に、地球儀形の石の親柱や個性的な照明柱を補修してそのまま生かすこととした。土俵と同寸法（仕切り板も埋めてある）の橋上バルコニーを橋脚部に新たに取付けたり、高欄の手摺を木製とし、楽しく親しみやすい橋を意図した。

古い橋を見ていくとその時代の橋に込められた人々の思いに強く打たれる。斜長橋の新大橋や中央大橋などが我々に何の感銘も与えないのは新技術の特性なのか、または我々自身の橋に対する思いが軽くなったのであろうか、あれやこれやと考え込んでしまうのであった。



世界と日本のウォーターフロント



aaca理事・運営委員長
有限会社 宮脇 檀建築研究室 代表取締役
MAYUMI MIYAWAKI
宮脇 檀
東京都渋谷区代官山町4-1
TEL 03-3464-9600

「東京湾と一緒に考える」

世界中でウォーターフロントが注目されるようになってから久しい。

理由はすこぶる簡単で、産業構造の変化で製鉄や機械等の製造工業や物流が主力から外れてしまったからだ。そして、いわばその死んでしまったその地域が都市の主要部に隣接しているのだから、何とか町と組み合わせてもう一度繁栄させることはできないかというのがウォーターフロント問題である。

シドニーでも、シアトルでも、ニューヨークでも、ボストンでも全てヨーロッパ型の港は、すぐ後背地に、にぎやかな繁華街を控え、少し手を加え市街と結ぶことによって簡単に商業拠点として活性化することが出来る。たとえばシドニーの町のどこか

らも港とオペラハウス、港内を行き来する数千の色とりどりの船が見える風景や、マンハッタンのサウスストリート・シーポートの屋下がり、裏のウォール街からどっと繰り出す人の群を見れば、都市の主要部と密接に結びついていることがこうしたウォーターフロントの成功を決めるということがすぐわかる。

それに対して明治開国以降の日本は、その資源の少なさを原料輸入、加工、輸出という形で補わねばならなかったために、海岸線はかつての物資の集散港だけではなく、臨海型産業に占領されつくされることになった。小学生の時に習った日本の4大工業地帯という部分を飛行機かヘリで飛んでみると良い、海岸線のほとんどがこうしたその関連の倉庫等のいわゆる港湾施設が広大な地域をしめていることがわかる。

日本のほとんどの町で、「港」は街から離

れた、寂しく、女が一人歩きできないイメージであるのはそのせい。海から見る東京湾は、後発埋めて立てのディズニーランド等の少数ない地点以外は、千葉から川崎、横浜にいたるまで海岸部に街の明かりが見えない。京阪神間はこれよりなお激しい。

だから私たち東京の住民は、すぐ銀座の裏に、浜松町の後ろに海があるにも関わらず、海と言えば湘南まで行かねばならぬと思いつている。海と街との間に暗い港湾施設類が立ちはだかっているからである。都市計画法や役所の縄張り意識から、港湾地域には直接港湾に関係する施設しか許可されず、住居も商業も建築できなかった部分もある。

けれどもこれはもったいない話。東京は江戸時代、港湾都市として栄えた街。海とそこからあがってくる河川が東海道などの5街道以外のもう一つ道で、玄関だったの

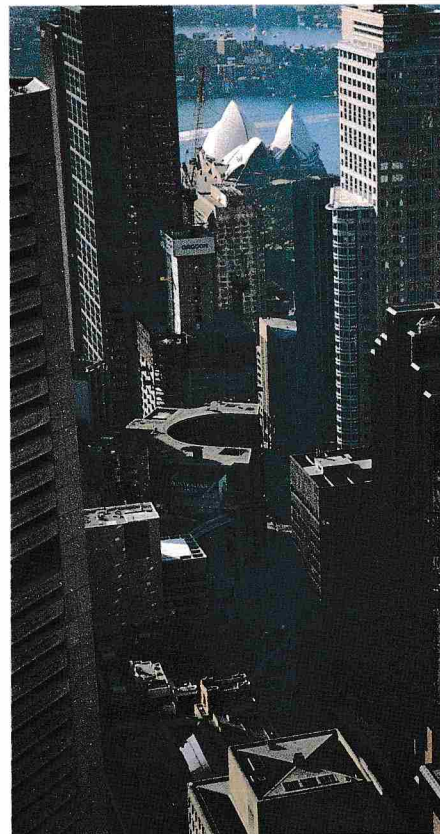


ウォール街に直接接しているサウスストリートシーポート

だ。街や家々は海や川に向かって開かれ、橋は海から上がってくる人達のためのゲートとしてその裏側がデザインされていたのだ。今でもそれを復活することは簡単で、要するに今ウォーターフロントで、水に背中を向けて建っている施設群を、水の方向に向かせるだけのこと。

臨海地区に新たな開発を行うよりそう

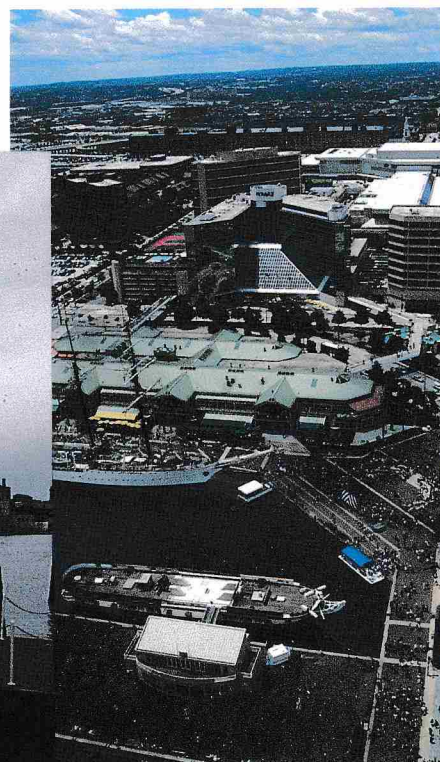
した計画と、それを裏付ける旧港湾施設の構造改革とが必要だといわれるのはそのせいだが、日本人は何時も新しいものが大好きで、目はそちらばかりに向く。それよりも、既存の港添いの街の暗い部分を、なんとか海に向かって切り開き、すでにある繁華街と続けるだけでよいはずなのだが。



ビジネス街の向こうにオペラハウスが見えるシドニー



シドニー港を直接包み込む都市施設



ホルテイモアのウォーターフロント
既存の街と一体化しているのがわかる





aaca会員
版画家
日本版画協会会員 日本美術家連盟会員
TAEKO TAKABE
高部 多恵子
神奈川県横浜市青葉区あざみ野4-16-43
TEL. 045-901-2009

今回、日本建築美術工芸協会の第1号として、幸運にもニューヨークに留学させていただく事が出来、出発前はあれこれと夢がくまらせ、山のような計画。しかし、最終的に3つの目標に絞って研修することにした。

1番目は、エキサイティングなニューヨークの現代アートについて、美術館、街のアート、ミュージカル等々、数多く見学、取材すること。

2番目は、多くのアーティストに会い、アトリエを訪問し、どのような環境の中で制作し発表しているか。

3番目は、ニューヨーク周辺を旅し、歴史の中に見る芸術表現、宇宙と生命の神秘に関する研究。日本と異なる文化、生活等取材、研究すること。

まず1番目の美術館については、メトロポリタンを始めとし、MOMA、グッゲンハイム、クラフト、ナチュラリスト、ボストン、フィラデルフィア等数多くまわることが出来た。それぞれ内容の充実はもちろんではあるが、建築の素晴らしさ、見やすさ、展示方法等、目を見張るものがある。

特にメトロポリタンにおいてはそれにした。私が興味を持ったのは、北アメリカの民族の展示であった。歴史の浅いアメリカではあるが、そこには美しい洗練された、しかも、ユーモアとセンスのある不思議な魅力の彫刻や工芸品が多く見られた。

また、SOHOの画廊においては、日本人のまとめようとする作品表現に対し、壊そうとする表現とでも言おうか、八方破れ的な作品が多く見られた。あるニューヨークのアーティストによると、アメリカはテンポが早いので十分に消化する前にどんどん制作し、変化していく。故に、深みのある作品と言うより単発的に爆発的な作品が多い。人の目を気にせず、また見る人もそれを納得し気にしないのに対し、日本の場合は、長い歴史の上に立つ国だけにじっくり考え、見る人にもそれを納得するまで時間を与える。それ故に心に強く感じるものがあるのではないかと……。街のアートにおいても同様であるが、むしろSOHOの街並みは決して美しいとは言えないが、建物や壁、行き交う人々の中から不思議な魅力を感じることが出来た。街全体がアートである。

感じる事が出来た。街全体がアートである。

イサムノグチの美術館においては、恐いほどシャープで洗練された線の美しさの中に、さりげなく組まれた曲線、水に濡れた石の表情からかもし出す不思議な宇宙。エキサイティングなニューヨークの街との対象が非常におもしろく感じた。

2番目のアトリエ訪問であるが、SOHO、ニュージャージー、ロールアイランド等、何人かのアトリエを訪問することが出来たが、すべてが高い天井の広いスペースを持ち、土地の狭い日本とは環境も大きく異なっているのには、羨ましい限りであった。ロールアイランドの作家においては、海に見える美しい自然の中にあり、まるで別荘のようである。マサチューセッツの陶芸家マイケルさんは、以前日本の備前で修業し、今も手づくりの登りがまを造り制作している。自分の作品を1人でも多くの人に使ってもらおうと、お寿司屋さんを経営し、自分でも握っているという変わり種。又、ニュージャージーでは、たくさんの古い倉庫が建ち並んでいて、あらゆる分野のアーティスト



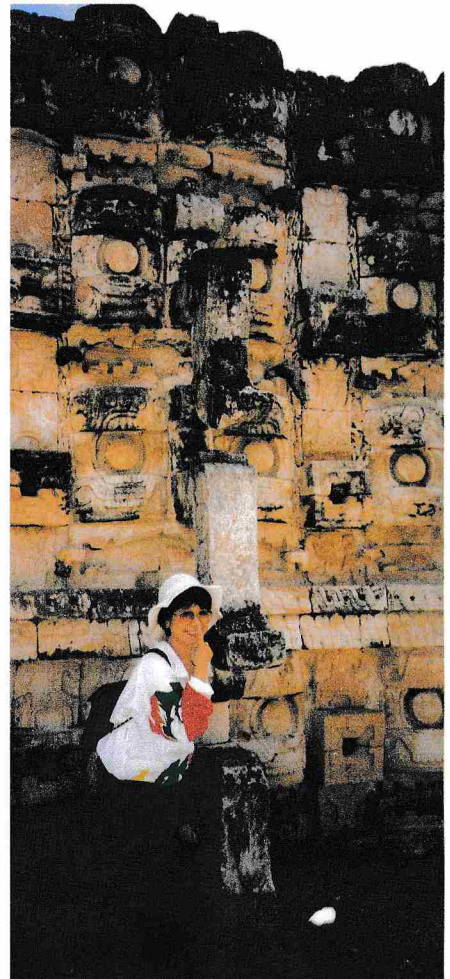
太陽のピラミッド

トがそこをアトリエとして借りている。その中の一角を25年前、日本から渡米した、みどりカーティスさんのアトリエがある。ちょうど年に一度のアトリエ開きがあり、新聞等でも大きく取り上げられるほど今では名物となっている。私も、たまたま彼女の好意で作品を展示するチャンスが持てた。普段は三重の鍵をかけ、外から入る事が出来ないが、この日だけはフリーパス。大勢の人達に見ていただく事が出来た。そこで画廊のオーナーさん等に認められると個展を開くチャンスもあると言う。

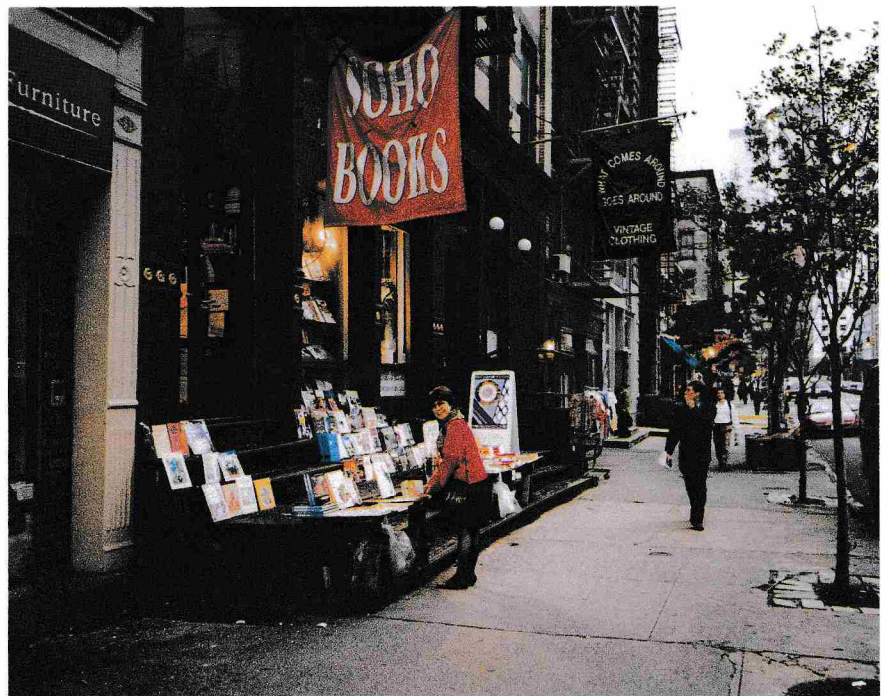
3番目は、今回ニューヨークの他にメキシコの遺跡めぐり、ロールアイランドの美しい海と街並み、ボストン美術館や今も残る昔ながらの美しいレンガ造りのマンション、マサチューセッツの透き通るような青い空と紅葉、今も昔の生活がそのまま受け継がれているアーミッシュカントリーの歴史と民芸品等々取材する事が出来た。中でもメキシコ（特にメリダ）は、発展途上国とは思えないくらいの近代的な空港で、見事な吹き抜けと、まるでホテルの庭のように美しい緑の木々が植えられた空間を持ち、廊下には作家の作品を個展のように展示しているのには目を見張るものがあった。また今回の取材の第一目的であるテオティワ坎の遺跡はさすがで、特に「太陽のピラミッド」は、1年のうちある一定の時期に、太陽はピラミッドの中心点の真上に来ると言う。宇宙、特に太陽の作品を多く制作している私にとって非常に興味深く、60度の角度を持つこのピラミッドに、また38℃という暑さの中、頂上に登った時の感激は言葉では言い表せないほどのものだった。崩れかけた石畳の色と形、そこに僅かについた苔の緑の色との調和。どの絵を見るより美しい。壁に掘られたレリーフにおいては、中から何か叫びが聞こえてくるような、そんな気もした。五感で感じるとはこの事が、と思った。「月のピラミッド」、「ウシュマル」、「カバー」、「チチエン・イツァ」等々も同様である。

このような事取材しながらのワークショップでの制作は、大変有意義なものであったと同時に、我が家での制作においては、すべて手の届く所に材料がある

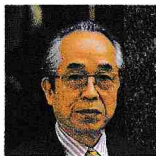
が、ニューヨークでは重たい材料や道具を持ち、電車に乗り、大勢の中での制作。時にはプレス機を使用するのに何時間も待つ事もあった。また材料が不足したと言っては、たった1つを画材屋に買いに走り、版がうまく作れないと言ってはまたアパートに戻り、一からやり直し。その中で制作は、ちょうど35年前、版画を始めた頃を思い出させてくれた。また材料不足での制作は、逆にその中で如何にして制作するか……と考え、別のアイデアが生まれ、新しい方向につながって行ったのは、今回一番うれしい経験であったように思われる。ワークショップでの多くの作家達との出会い、技法交換等についても同様である。今回80日という短い時間ではあったが、多くの事を取材、経験出来たことは、私にとって一生忘れられない事であると共に、この度留学にあたり、お力添え下さいました文化庁、日本建築美術工芸協会の芦原義信会長、中島昌信専務理事はじめ会員の皆様、大久保婦久子先生、モンゴル会の皆様、ニューヨーク帯在中、私を様々な形で応援下さいました日本総領事館の小嶋光昭様、ワークショップの皆様、みどりカーティス様、ジム・ニッケル様、ロベルト様に心より感謝し、お礼申し上げます。



ウシュマル



SOHOの街角



aaca会員
グラフィックデザイナー
日本サインデザイン協会会長 株式会社伊東デザイン研究所会長
JUTAROU ITOH
伊東 寿太郎
東京都千代田区内神田1-7-6北大手町ビル
TEL. 03-3296-1888

「上海アールデコ・スカイライン」

いま、上海は21世紀近未来に向かって、東アジア随一の金融、商工業、文化の一大センターに収まるべく、都市再開発に取り組んでいる。

かつて、東洋のパリ上海のランドマークは、英国風にバンドと称される黄浦江のリバーサイド外灘（ワイタン）に林立する洋風建築群であった。長江を遡行して黄浦江に進入する船舶の乗客の視野に広がるスカイスクレーパーこそ19世紀このかた上海のイメージを形成してきたバンドの景観である。地理的にいえば、北は蘇州河に架かるガーデンブリッジ辺りから、南は金陵路に達する地域がそれである。旧上海県城の

北側にこのような建物が存在するのは、いうまでもなくこの一帯が1845年以降、順次英、仏、米の租界として発展したからに他ならない。もともと租界は、清国政府の分離政策による西洋人の生活圏であって、彼等は租界の外に出ることを禁じられていたのである。ところがその後中国側の内乱によって中国人難民が租界内に逃げ込み、西洋人と中国人の雑居が公然となった。皮肉なことには、租界内のインフラの整備、治安の良さ、利便性などが富裕層の中国人を惹き付け、その存在が上海繁栄になくてはならない要件となっていたのである。

こうして、20世紀を迎えると、バンドの景観は新しい建築様式によって相貌を変えてゆく。1920年代から37年頃にかけて、億万ドルのスカイラインと謳われ

たコスモポリタン都市上海の顔が、今日見えるようなかたちに完成したのである。

その後の有為転変の歴史をたどることは省きたいがこの年の暮、列強の紳士諸公の侮蔑の目差しを浴びながら、外交音痴日本帝国主義は軍靴で南京路を蹂躪するパレードを行った後、大東亜上海都市計画なるものが、こともあろうに我が国の胆入で発案されたのであった。

写真は、90年代からライトアップされたバンドの夜景、左手にそびえ立つギョッラフ信号塔（20世紀初頭）から右手ジャーデン・マゼソン商会（1920年）までのアールデコ・スカイラインが、積み上げた宝石の塊のように妖しく光を放っている。かつて悦楽をほしいままにした魔都上海は、粧いも新たに21世紀を生きようとしている。



撮影: 木村 賢郎





aaca会員
照明デザイナー
近田玲子デザイン事務所所長
REIKO TIKADA
近田 玲子
東京都渋谷区神宮前1-11-11-706
TEL. 03-5474-0306

「街の顔・駅前広場の照明」

千葉市では、交通渋滞緩和のためJR千葉駅前の幹線道路を地中化し、市内を循環するモノレールを開通させたが、モノレールの橋脚が巨大な構造物として駅前広場に広がり、景観上気になる存在として浮上してきた。冬には積もった雪が溶けて歩行者の上に落ちる心配もある。

こうした事から駅前広場整備計画では、第一に車と人の動線を分離すること、第二にモノレール下の落雪よけシェルターの設置、第三に駅前景観に潤いを持たせる垂直緑化が計画された。(設計/山手総合計画研究所) 同時に、光による魅力ある街の顔、街の玄関口づくりが求められた。

照明計画では、第一に広場に面した店舗につなぐ賑わいをつくりだす事、第二に市内の幹線道路から見たゲート性の創出、第三に地下歩道を有効に利用してもらうための地上と地下を結ぶ光づくりを心掛けた。また、全体に温かみのある光の色を使い、照明器具は出来るだけシェルターに取り付け、独立したポール灯を建てないようにした。

歩行者横断地下道の入口に作られた直径22.5mの透明なドーム天井には、ランプ寿命5万時間、毎日6時間点灯しても約23年間メンテナンスの必要がない高輝度LED(発光ダイオード)による演出照明をした。

RGBの光の3原色の組み合わせによって

赤、青、緑、紫、青緑、橙、白の7色にすることが出来る。曜日毎に色を変えたり、毎正時に3分間7色に光の演出をして楽しい待ち合わせ場所になるようにした。

これまで「暗い、汚い、危険」と、利用者から敬遠されがちであった地下歩道のイメージを払拭するため、ここでは側壁に照明入りのガラスブロックを使った。外の喧騒が嘘のような静かな雰囲気と、パーティや講演会も出来そうな柔らかく明るい光壁が広がる。光壁の真ん中には

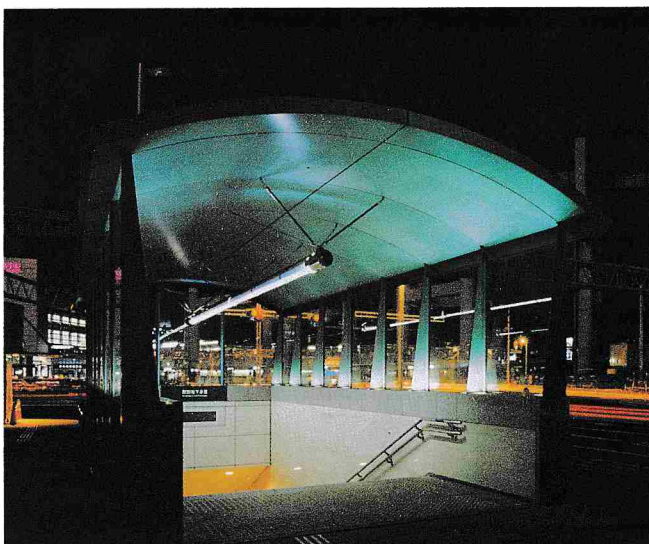
小さな飾り窓があり、市民の作品を展示する場となっている。

出入口上屋には直線状の光るパイプを吊るし、地上と地下を結ぶ光のサインとした。

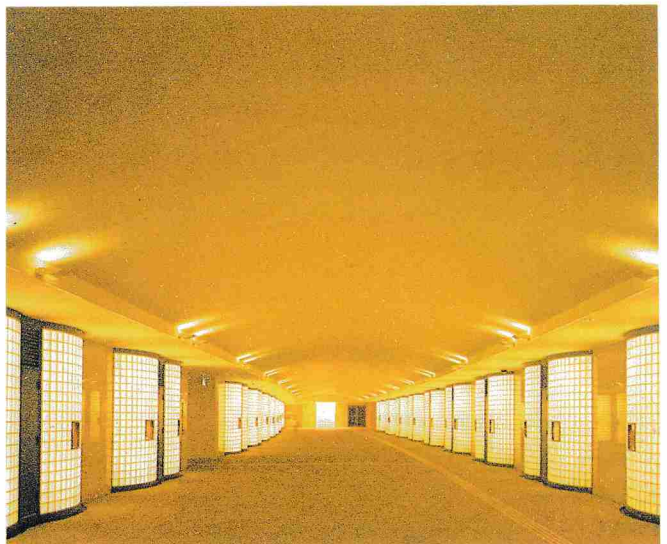
最後に、景観上、最も気になるモノレールの橋脚は広場側にある一番入り組んだ3本の柱部分に投光照明を行い、夜はモニュメントとして積極的に見せようと考えている。点灯した時が楽しみである。📷



千葉東口駅前広場ドーム



千葉東口駅前広場地下歩道出入口



千葉東口駅前広場地下歩道



彫刻家
YOSHIZOU IGARASHI
五十嵐 芳三
東京都中野区弥生町5-16-21
TEL.03-3381-1785

ブランクーシとの 出会いと私の彫刻

人は夫々の生まれ育った環境を、いつまでも心の奥に秘めている。

抽象彫刻の祖と云われているブランクーシは、1876年ルーマニアの農村に生まれた。

地元の美術学校で彫刻を学ぶにつれて、ロダンにあこがれるあまり、貧しかった彼は、徒歩にてパリに赴くのである。

彼の仕事は、ロダンにも認められる事になるのだが、「大樹の影のもとでは何も生まれぬ。」と言ってロダンのアトリエを去り、当時の多くの新進画家、マチス、ピカソ、モジリアニ等と知り合い、新しい作家活動に参加する。

ブランクーシの彫刻は、初期にはロダン風のモデリングの中に独自の情緒を持った具象彫刻であったが、やがて単純化の追求と共に抽象化へと昇華されて行く。

その様な彫刻の形の中に、彼の故郷にある民家に装飾されていた様なギザギザの形や、古来から伝わっていた神話の鳥等が現われて来るのである。

これはパリという異国にあって、ブランクーシの心に秘められたイメージが彫刻として現われて来たのだ。

私は十数年前にブカレストに旅する機会があった時、ルーマニアの古い農村の建物や民具を展示している住居博物館を見学する事が出来たのだが、ここにはまさしくブランクーシの彫刻の故郷があった。ルーマニアの苦しい共産主義体制の現状とは裏腹に、古い文化の新鮮な人間性を感じたものである。

ブランクーシが死の前年、フランス政府に遺贈し、現在のポンピドーセンターに再現されたアトリエぐるみの彫刻と、ブカレストにある住居博物館との結びつきの中で、彫刻家の一生が更に生き生きとして来たのであった。

この時の旅の体験は、私も自分の彫刻制作の中で、出雲大社の建築にダイナミックな人間性のモニュメントを感じた事がきっかけで、抽象化の方向に進む様になっていたのだ、一層心にしみるものであったのだ。

大社造りの柱と屋根との組み合わせから、私の彫刻は屋根の下に在る「二人」

をイメージしたものであった。

又次に私は、鑄造の方法として二つの形を合わせて一つの彫刻にする事を思いついて以来、組み合わせによって構成する「たね」のシリーズが続く事になった。「たね」は二つの細胞から始まる命の基であり、やがて発芽してゆくものである。

抽象化した形の中で、古来から日本には優れたデザインされた物が大変多くあ

る。建築・造園・民具から織物・紋章や水引きと多岐にわたっている。そういった中で、形を結び合わせたり調和させたりと、日本の造形感覚は一きわ優れた伝統がある。

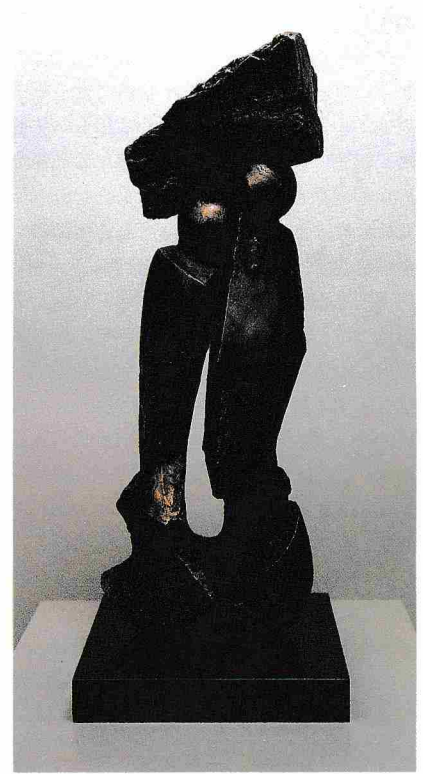
私も何とか新しい造形物を自分なりに生み出せればと願いながら「結び目」の形を彫刻の課題にしている。



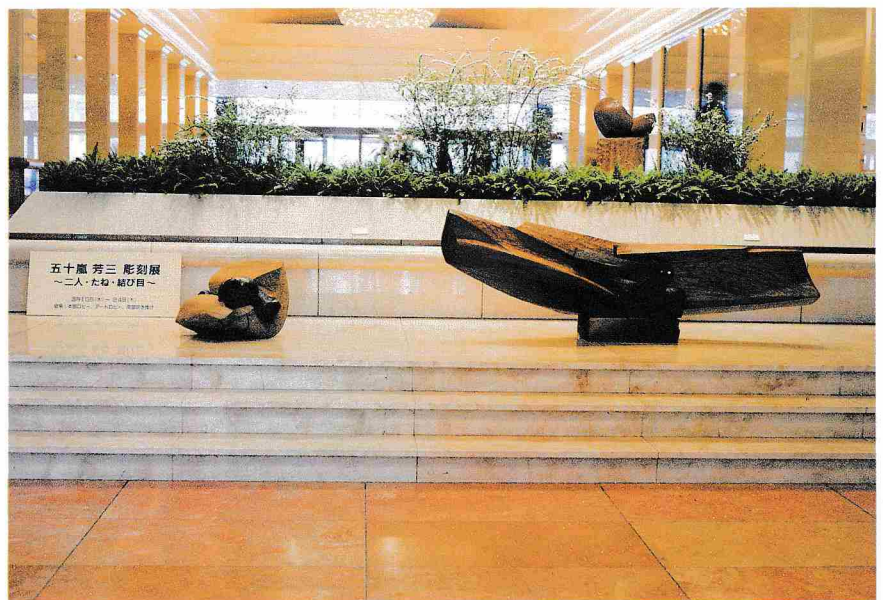
「結び目」1983年



「結び目」1996年



「二人」"couple" 1965年



五十嵐 芳三 彫刻展(二人・たね・結び目) 於 京王プラザホテル ロビー



aaca会員
環境デザイナー
永原 浄デザイン研究所所長
JOU NAGAHARA
永原 浄
東京都板橋区成増2-36-36
TEL. 03-3975-1800

改めて街路環境を観る

「静かでしょ」えそうですね。「美しい街でしょ！」シーモルトベッコ「二つの世界まつり」という音楽祭がイタリア、スポレートSpoletoの街で毎年開かれている。その街角での出会いです。中世がそのまま息づいているメデーバルタウンでの見知らぬ婦人との短い会話でした。四分の半世紀を新宿の街に来て居ります。

年々街の景色が変わっているように人の風情が雑多な人の流れと共に変わってきているように思えるのです。主要街路の歩道上に歩行をディスターブする黒い自転車群が6尺位の中（約1.8m）で連なって、その間に大型のオートバイがあり、店舗側に寄ると持出看板が行手を阻むので歩きにくい。歩行しにくい路面は靴を早く痛めてしまいます。少しスムーズに歩けるかと思うと前方の中年の団（グループ）が煙草の煙を後に飛ばして歩いている。煙を避けて前に出ると前方から若い女性が自転車をとばしてくる。後からも、威嚇的にベルをリリンと鳴らして歩行者は邪魔だとばかりにすり抜けて行く。ミュンヘンの街の様に自転車路が区分されていれ（ように）ばと思うのです。視覚的にはハテナベンテングマシ（Tengma）が連なり、ファサードが見えない位（まで）に看板が頭上に垂れ下がっている。そんな状態の路上で大型地震が発生したら一時にある方向へと走り出し、自転車を走らせ、建物、横丁から人が路上に溢れ一瞬の内に歩道はパニックを引き起こす事が、想像されます。拡張した歩道には自転車が波のように巾員を狭くしている。オートバイ、ベンダーが倒れて狭くなった非難路を塞ぎ、急ぎ逃げる人をきずつけてしまうだろう。極めて都市人口の高い東京で秩序と紀律を失いつつあるイージーゴーイングな人々の間では極めて危険な事になるでしょう。仕事柄、都市街路の環境ぐらい美しく、静かな風情のある柔らかな空気を造らねばと思っていますのです。私自身が感じる空間造りのために内省的な思考を求めて旅をし、イメージを構築し、環境とは何かと歩いて出会ったシーンを都市風景の点景として写真にしています。その思いを今回のトークショーで写真と共に話させて頂きました。

スポレートの街は今にもくずれそうな外（観）いと長い石畳の坂、グリ石を敷いた急な

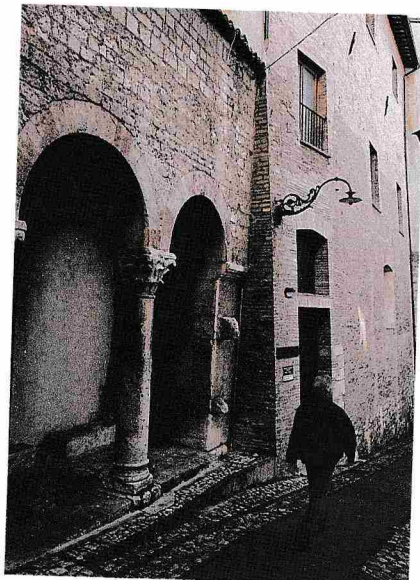
道、永い歴史の流れの中で空虚なグレートン（Town）に変わった街並は静かな情景を醸し出している。そんな街で世界のアーティストが音楽祭を開くので8月は大変な人で埋ってしまうのです。

もう一つ、北イタリア、バツサーノ・テルグラツパの街です。グラツパ（Grazia）（食後に飲む強い酒）で有名よりも建築家パラディオのモデルで1589年に最初に造られた木造の橋（現在のは7回目）のある風景で知られて居ります。それが街のシンボルの風景なのです。歴史的な戦争の悲劇のあった街にドイツから、オーストリアから多くの観光客がやって来ます。そのポンテ・テ・アルピーニ（Ponte Tè Alpini）を

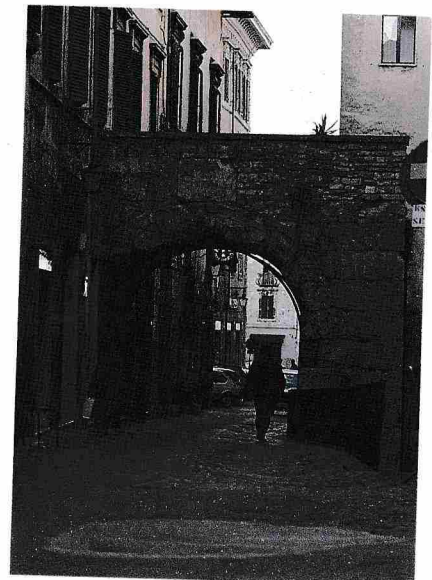
渡りに。アルプスを背景にグラツパ山の麓から流れる水量の多い流れの中で釣りをする人を橋上から眺めている人、兩岸の花いっぱい（の花）の窓飾り、家並みの美しさ（の美しさ）が一体となって暖かな風情を感じさせているのです。それがバツサーノの風景として知られているのです。日本の都市の中でなかなか良い風景が見つからないと言われているのは環境デザインと気負って、ヨーロッパやアメリカで見掛けた事のあるような形が人の心に好ましい情景としてフレームワークされないからではないかと思うのです。環境の造形は感じる風景を創る事だと信じているのです。



バツサーノ・テル・グラツパ・ポンテ・テ・アルピーニ



なだらかな路地の一つ



ドルソのアーチ

アピアランス会員作品紹介



フレスコ
MISAO OHNO
大野 彩
東京都大田区南馬込4-18-13
TEL 03-3771-6535

昨年イタリア滞在中にポローニャの近くのドツツァ市に招かれて、ビエンナーレに参加し、街の家の外壁にフレスコを制作した。米、伊、ルーマニア、リトアニア、日本から作家が集まった。マシェラーニ賞を戴いた。

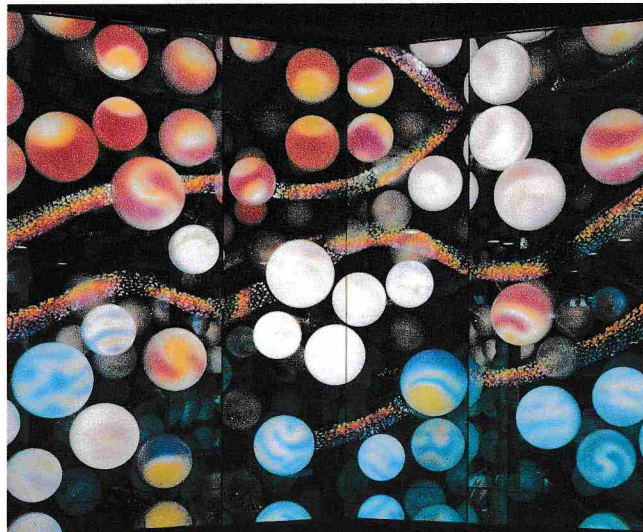
「祝い」
設置場所：
Via dei Amici DO22A(BO)イタリア
290mm×200mm



マブライトアート研究所 所長
SUMA TSUCHIYA
土屋 壽満
大阪府大阪市住吉区杉本2-10-14
TEL 06-698-2525

空の新時代に向けて世界に開かれた地球駅=OCATの理想と夢をシンボライズする光の芸術スマブライトは、38個の球体が上下、左右、奥に無限に増幅し、機内から見下ろす雲海の如く人々を飛翔浮遊する感覚に包みこむ。

「空のカレイドスコープ」
設置場所：
大阪市浪速区湊町1丁目OCATビル
300mm×500mm×100mm



彫刻家
KIKUMARO MOCHIZUKI
望月 菊麿
東京都文京区湯島2-19-5-805
TEL 03-3813-2722

建築界不況のせいでしょうか、美術界も影響を受けているようです。今夏、仙台の民間ビルに作品を設置しました。昨年末の個展発表作で自己目的だけの作品が実際の空間に入る事はまれです。世の中進んでいるような気がします。



「喚起装置 宙空の地平95-」
設置場所：
仙台市青葉区中央3-2-1
青葉通りプラザ
175mm×76.5mm×42.5mm



水墨画家
YUMIKO YAGYU
柳生 由美子
千葉県習志野市谷津3-1-34-101
TEL 0474-54-0463

風の通り抜ける感じ、日の沈む瞬間、穏やかな雰囲気の中に秘めた強さ等私が受けた日本の美を青墨、淡彩で表現した。洋画から水墨に辿りついたので洋画的空間を生かし墨を基調とした新しい感覚の水墨画を制作したい。

「残照」
設置場所：未定
60mm×76mm



表情
多彩

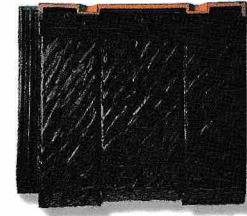
平板瓦セラシリーズ

玄昌石の自然な美しさが映える

「セラ・ストーン」



天然石を超える
「セラ・ストーン」。
玄昌石の美しい石目を持ち、
シンプルでありながら个性的。
雨仕舞をはじめ、
屋根材としての機能は
当然優れ、
低勾配の屋根にも最適です。



■ストーングレイ他3色

CERA-STONE

セラ・ストーンタイル

新感覚 KAWARA の家

樹々の緑に溶け込む焼きもの、三州瓦のやさしさが街並に落ち着きを与え、強さと快適さが長く住む人をつつみ込みます。

爽快でリズミカルな美しさ

「セラ・フラット」



住まいの外観も、
インテリア感覚でとらえる
現代人のこだわりを、十分に
お応えする「セラ・フラット」。
瓦が葺き上がると
整然とした蓋の波が、
都市の風景に
美しく映えます。



■フラットグリーン他3色

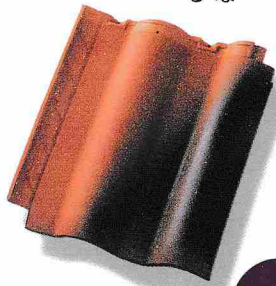
CERA-FLAT

セラ・フラットタイル

エレガントに柔らかな波型が連なる
「セラ・マウント」



ヨーロッパの伝統的な
街並をイメージさせる
「セラ・マウント」。
深みのある色合と
柔らかなフォルムが、
あなたの住まいに
奥行のある豊かさを
演出してくれます。



■マウントレッド他5色

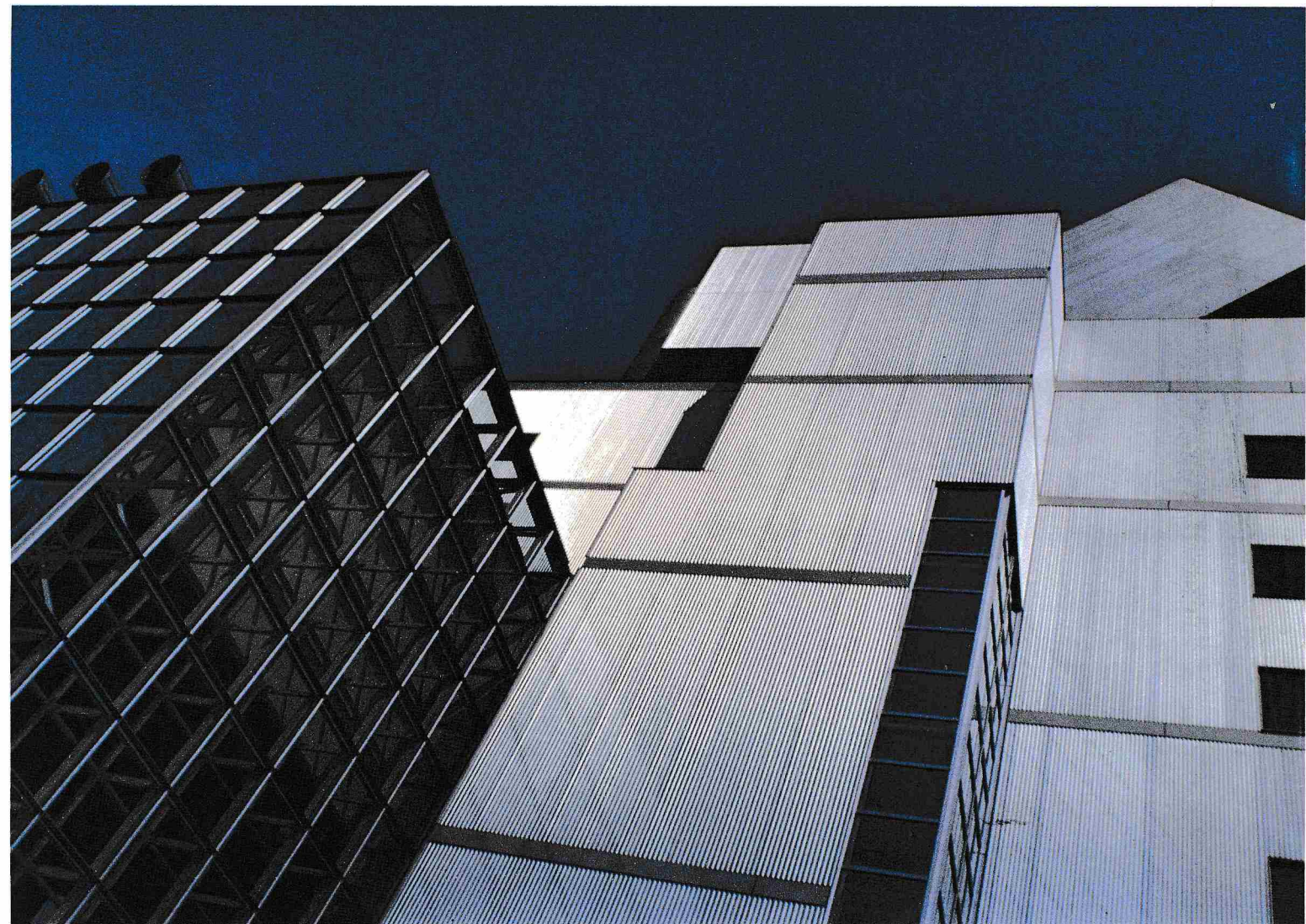
新発売

Cera-Mount

セラ・マウントタイル

Design & Technology

デザイン&テクノロジー



YKK APは、建物の表情を構成する開口部のアルミサッシやカーテンウォールなど、完成度の高い建築パーツをトータルなシステムで建築に融合させること、つまり、現代建築が求める時代のニーズにデザイン&テクノロジーの設計対応でお応えすることを企業テーマに掲げています。

**YKK
AP**

 **YKKア-キテクチュラルプロダクツ株式会社**

東京都千代田区神田和泉町1番地

YKK APホームページ <http://www.commerce.or.jp/YKKAP>